



↑元安川を見つめてたたずむ原爆ドーム。原爆が投下された時のまま、時が止まっているようでした。建物の下には崩れた瓦がそのままになっており、当時の様子が窺えます。



↑野木中、野木二中の生徒みんなの平和への思いを託した千羽鶴を「原爆の子の像」へ捧げました。



↑1年国語の教科書「碑」には、本川の土手で片付け作業に参加していた広島第二中学校の生徒が被爆した様子が描かれています。その慰霊碑を前に平和への祈りを捧げました。

野木第二中学校 長 直樹



私は、広島平和記念式典中学生派遣事業に参加し、戦争や原爆の恐ろしさ、平和の大切さについて、改めて学ぶことが出来ました。

現地での研修では、74年前から時間が止まっているかのように見える原爆ドームやボロボロの制服、変形したガラス瓶などを見学しました。その全てが、そこにあつた平和な日常を一瞬にして奪った原爆の恐ろしさを私の心に訴えてきました。

8月6日に行われた平和記念式典では、世界中から平和を願う多くの人々が参列し、黙祷を捧げました。子ども代表による平和の誓いの中の「自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにも出来ることです。」という言葉は、私の心に深く刻み込まれました。この言葉から、平和のためには大人だけではなく子どもにも何か出来る事があること、そして、私たちから活動していくべきだということに気が

づきました。

平和とは、決して当たり前の事ではなく自分たちが平和にするために努力して作りあげるものだと思います。今回の研修で学んだことを生かして自分ができることを探し、原爆の恐ろしさや平和の大切さを周りの人達に伝え、後世へと遺していきたいと思います。



野木第二中学校 針谷 藍



一日目は、資料館を見学しました。貴重な資料から、たくさんのお話を学びました。外国の人も多くいて、平和への思いは世界共通であること、唯一の被爆国である日本は、その中心であることを実感しました。

て、戦争の悲惨さを伝えていく責任を感じました。

二日目は、広島平和記念式典に参列し、たくさんの方のお話を聞きました。外国の人も多くいて、平和への思いは世界共通であること、唯一の被爆国である日本は、その中心であることを実感しました。

三日目の被爆体験講話では、82歳の佐渡郁子さんが体験談を話してくださいました。広島は、三日三晩空が真っ赤で、パチパチと音が聞こえていたそうです。この話を聞き、恐怖と悲しみが湧き上がりました。

学ぶことの多かったこの三日間で、私たちがどれだけ平和に慣れ切っているかを思い知らされました。私たちの世代は、この平和を守り続けなければなりません。そのためにも私は、平和が当たり前ではなく、ありがたいこと、戦争の無意味さを伝え続けていきたいです。



問 こども教育課(57) 4182



# 平和への願い



野木町では、平和活動のリーダーを育成することを目的に、平成26年度から小山市と合同で中学生の代表を広島平和記念式典に派遣しています。28年度より結城市も加わり、今年度も2市1町で参加しました。

8月5日(月)～7日(水)の日程で派遣し、6日(火)には広島市で開催された平和記念式典に、小山市と結城市の中学2年生と共に、野木中学校2年生2名、野木第二中学校2年生2名の計4名が参列しました。中学生の代表として、また、町民の代表として立派にその務めを果たしてきました。

派遣を通じて「平和」について学んだこと、現地で体験したり感じたりしたことなど、中学生4名の感想を紹介します。

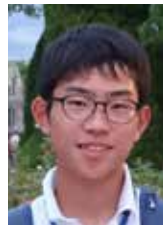
野木中学校 小野 わか葉



広島で間近に目にした原爆ドーム。原爆の凄まじい破壊力に恐怖を感じ、背筋が凍るような感覚を覚えました。また、平和記念資料館では、残酷な資料が次々と目に飛び込んできました。それは、まるで地獄のような光景で、私は言葉を失いました。痛々しい資料や遺品の数々を見て、二度とこのような悲劇を起こしてはならないと思いました。私が特に印象に残ったのは、灯籠流しです。一つ一つに平和への願いが込められた灯籠で、美しく彩られた元安川。幻想的な光景の中に命の尊さを感じ、胸が締め付けられるようでした。

三日間を通して、原爆の恐ろしさや戦争の無意味さ、今の生活へのありがたさを学びました。また、知った現実はあまりに辛く重いものでした。この辛い現実を二度と繰り返してはならない。だからこそ、この現実を一人でも多くの人に語り継がなくてはいけません。私は、この広島派遣に参加して、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを学ぶことが出来ました。事前研修で戦争について調べたつもりでしたが、実際に訪れた原爆ドームは想像以上で、まるで74年前から時間が止まったかのように、私たちに「忘れてはいけない」と原爆の威力や恐ろしさを物語っているようでした。また、平和記念資料館では、被爆者の遺品や写真、絵などが

野木中学校 中村 勇仁



↑灯籠に平和への思いを書き入れ、元安川に流しました。

ではならないのです。私も、世界の恒久平和を願う一人として、平和のバトンをつないでいきます。

展示されていて、被爆者や家族の苦しみが伝わってきて、見ていられませんでした。戦争のない平和になりました。戦争のない平和に生まれた私は、令和初の平和記念式典に参列し、戦争は絶対に起こしてはならないと改めて強く思いました。

今回の研修を通して、私達が当たり前だと思っている普段の日々は当たり前前の幸せではないのだと気がつきました。平和は理想ではありません。「8月6日のヒロシマ」を忘れないように、一人でも多くの人にこの貴重な体験を話し、私達が次の世代に繋げる平和のバトンになりたいと願います。



↑原爆死没者への追悼の意を込めて献花しました。平和記念公園はせみの声が大きく響いていました。